11時間の手術

手術の後遺症　主治医の話では①口の開きが狭くなり話がしづらくなる②食物や飲み物類が口や鼻からこぼれ流れる③固形物が食べにくくなる④首も手術するので左腕が上がらなくなる⑤首の一部切除で後方を向きにくくなる⑥顔にメスの痕が残る⑦体重10%減る――

医師は最悪の状況を想定して話すと聞いている、それにしても今より別人になることには違いない。それでも命あっての物種（ものだね）の考えは変わりなかった。

月が変わり４月に歯科大に行くと色々とアドバイスや心構えを教えてくれた高橋医師が新年度の異動で部署が変わっていた。ボクは不安になった。この期に及んで別の医師に変わるとは---

しかし杞憂だった。ボクの担当グループ医師は3月時点のままの陣容で進行していくことらしいことが分かった。「九州歯科大附属病院なかなかやるじゃん」。不安が消えた。

４月25日手術の朝。妻と義弟が緊張した面持ちで来院した。午前８時手術室へ。前日にスタッフと一緒にリハーサル的な動きを学んだので要領は把握できており精神的に余裕があった。すぐ全身麻酔、スタートした。

11時間後の同夜午後9時すぎ、回復室で覚醒、妻らの安心の表情を見て手術の終わりを知った。生きていることを実感した。

しかし妻らが帰ったあと、予想外の出血がありまた手術室へUターン。麻酔前に医師団の声が入る。みんな緊迫している、患者としてはこんなに不安はない。翌朝、回復室で目覚め。ふたたび「再生した」。

手術翌日と翌々日の2日間はつらかった。なにしろ顔半分を切り開き、上顎（あご）と歯を切除、首と腹の一部を切り裂いたのだから痛くないはずがない。命があることは自認できたがまるで生きている感じはなかった。

思わぬことが起きた。手術3日後の４月29日夜、急に心臓がバクバク速くなり血圧も１００以下に急低下した。歯科大は単科大なので循環器専門医はいない。小倉記念病院に救急搬送される。心臓の異変症状は数年前からあったが別に気にも止めなかったが、ここで発症した。

高橋主治医は救急車に乗り、ストレッチの上の私のそばにいる。妻も再び出直し、同行した。「不整脈、心房細動」と診断された。

高橋主治医は診察が終わる深夜まで付き添い、歯科大へ帰るまで私と妻に同行した。これまでしてくれる主治医を信頼できないと言えば罰が当たる。命と真剣に向き合ってくれている。そう感じた。ボクの手術結果もきっと成功裡が待っていると確信した。

心臓の診断は「不整脈」。手術などの影響で身体の免疫が落ちた時、現れることがあるらしい。

ともあれ心房細動の治療のビソノテープを毎日貼ることになった。癌治療が終わった後は小倉記念病院で外来治療すること、念を押された。